



○露伴の系比較評

同き点

一 生地

二 生年

三 学位肩書きの有無

四 姉弟の人数

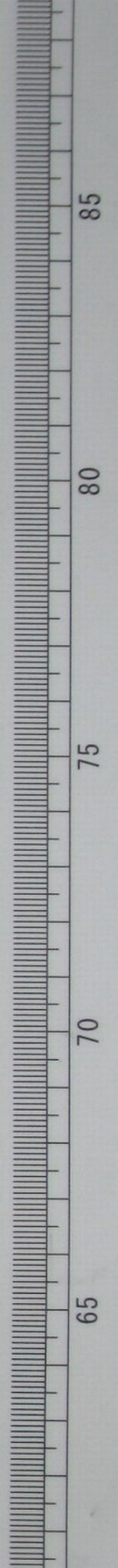
五 世のあり方

六 美食好み

七 門人の比較的多少

土、竹田曰く夫貞學力者豪而粗放、倚才藻者巧而纖弱

家ハ學力と才藻との別ハ紅は才藻に倚りたるか否か
紅の巧を被しと題
紅の巧を被しと題



ハ世凡^凡非^非格^格ヲ異^異ル^ルト上^上ノ^ノヲ^ヲル^ル

異なる点

一 家庭 固く風流なものと紅葉の洒落

の格付の嚴格

二 位 固く東京なものと紅葉の山の手

の格付の水準

三 體 軀 紅葉の瘦瘠と格付の肥満

四 文 を作した紅葉の人をより推搗是

しく格付の一致の可成

五 紅葉の歌人の名を知りて名を知り

的格付の萬巻の巻を讀み子守の路

を行ふすしむ的

六 紅葉の文の織機、洗煉、綺麗麗、実

境、流動、冲淡、鎮密、委曲、悲慨、

形容、等の文字を以て形容すべく

格付の文の雄渾、沉着、高古、勁

健、含蓄、豪放、精神、清奇、超

詰、曠達、華の文を以て形容
すべし

七 紅葉の文は實境なり、散り局所的なり
若夫現代も於て後世も同じ
思想、明治風俗を窺ひしは紅葉
の文を採るべく
露伴の文は曠達なり、己の著述遍
的なり、千載の若に溯り、萬代の

後にしつりても替らざる、座の人情を
知りしとらるる、露伴の文も於て是し

八 紅葉の書は、駈と云ふ、瘦せ、露伴の
甚く、射と云ふ、肥く、しつり

九 紅葉の世を思ふに、窓孔スキマより、窺隙、
感あり、露伴の世を観瞰るや、高丘
より、下瞰カミを、射の概あり

十 紅葉の長と云ふ、千の良人の輩、出さる

世既も定福あり、と水と又短とすべ
きは祥瑞を祥瑞をニヤウズ井と
讀みしら如く終りにして永あるにあり
露はけ之より及より是より及せり

(辛亥八月五日夜徳)

○鏡鏡終りにして其少説中に致く
の待句を挿し、其作者書中
蠟光高懸照紗堂花を挿し

まじりて之の句あり、其少説中に
谷集りて出たるを却るるを
通夜物活中の江月照照風吹
永夜情をねおめは、水ありて
秋を歌より知るるを、
世勝子の両月より世を、
り、
○文の徳なる偉なる感吾がめ、

才なきものからけ急なれば今
年い急なれば今年に世に急なれば
世に急なれば世に急なれば
河の後知を急なれば急なれば
あまの急なれば急なれば

山まゝに被疑世に急
柳暗花明又一村

或は又急なれば急なれば急なれば
急なれば急なれば急なれば

の一約

或は又急なれば急なれば急なれば

あるは急なれば急なれば急なれば

急なれば急なれば急なれば急なれば
急なれば急なれば急なれば急なれば
急なれば急なれば急なれば急なれば

急なれば急なれば急なれば急なれば
急なれば急なれば急なれば急なれば

おりのごと天保あは子陸よあふあ政
あふりの醜作を卯年原をの
野のソヤを載十色をこ丸
とは如何なる意なるの一事も
まの名より五返をせ九ととふ
万字の意をなるとりふとふ
吐を懐くしとふ
そふの引く張ふおの物は

約徒とふゆくうした
ありれ美しき
舞なる
舞

○ 江降ふをわ 殿 降ふ降ふ 籙倉かをわのみ
中をらんが 何れもや

○ 或る事悟り 抱一の朱肉は 真紅マコカにして 無
りうこうつ 子さるしとけり 心持たるしに 表
愛能をも 見しうし 梅も 吾が 知く 某の 所者
なる 衆も 真草 疑無きもの なりし かつ けり
朱肉の色 せしる

○ 橋南 然に 鑿にして 文才ある 人なり 東遊
記 ぬれ 記の名文 なる 世の 知るところ なり

氏春暉と稱す。而して画に巧みなる
世多し。知らず。後歎く。梅峯仙と
号して凡そなす。其蘭の傍を見たり

○日本繪類考 全十卷の内の本




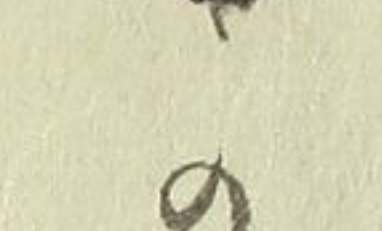
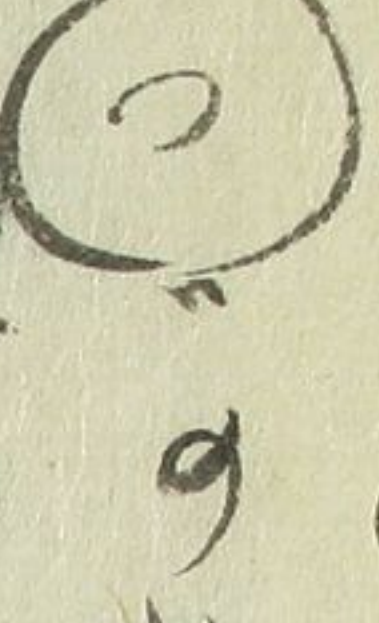

飯崎彦心著



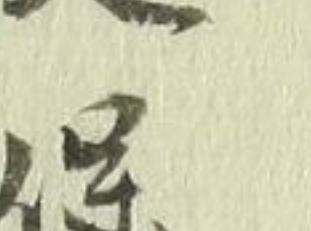
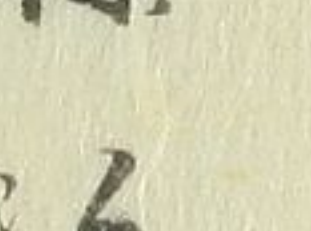
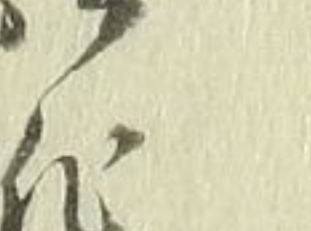
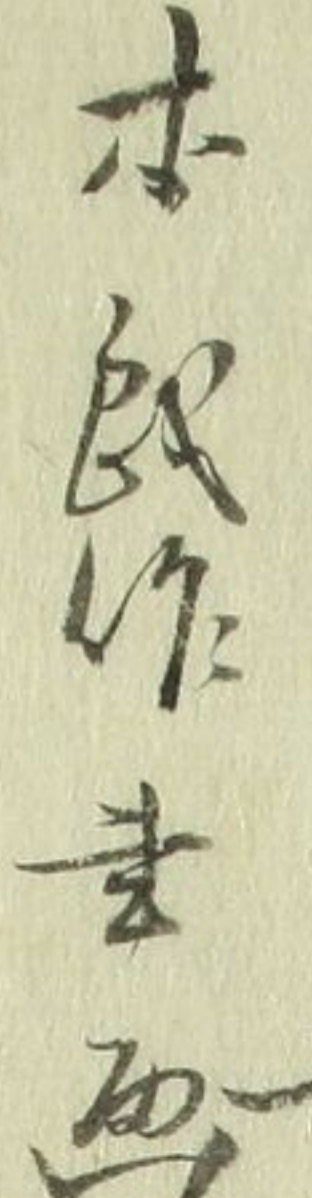
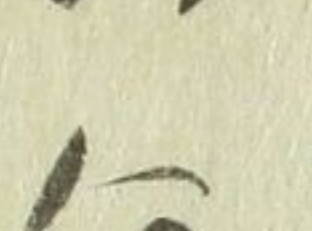
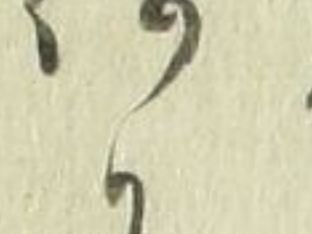

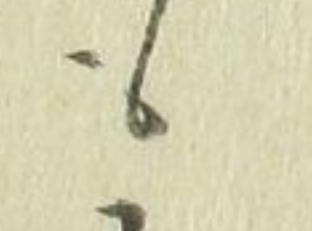



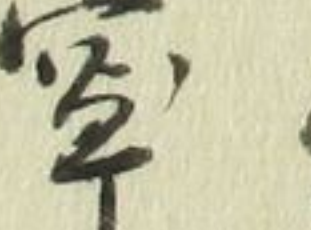
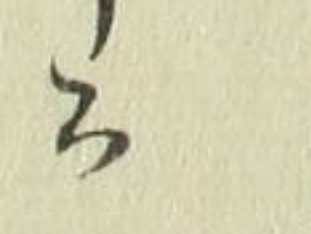
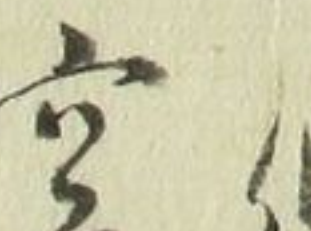
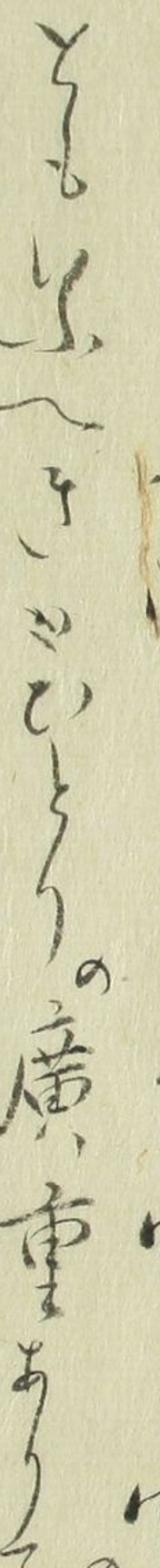
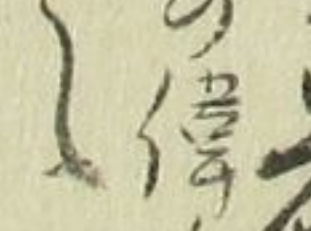


上神岡世鑑苑 一〇、五、六一

○もと信之を京都の者之業平涅槃之
圖。師。飯崎彦心著の作。を見る。後歎は
朱角筆にして昌信ともなり。昔平の顔に
鼎の傍にあり。其筆。昌信の少

何なる人なりやを知らず。なり。評
す。其張月云。を好と。一。飯仁村と
稱す。寛曆九年。信平。名。二。九州
の某あり。三。二九七

○飯崎彦心著。一日。評。画。の。ひ。て。回。く
一。画。は。美。なる。活。し。と。其。意。は。畢。意。を
得。る。と。其。の。白。時。り。り。と。真。の
画。と。い。ふ。なり。
二。光。琳。の。善。画。五。人。の。人。の。見。る。同。と。評。

六位のありし見るといふは
 似たりありし壁とて亭午花の意
 面  の如く  を  と  多
 の如く  を  例とす也
 三 担仙、名好子の色は同じにて
 香舟、そよ村着の縁あり
 四 土佐の駄目
 五 東に日本をよみしより

文政以来  天保迄  化  の  事  あり
 たりして我文化大に衰へ俳諧、讀
 本紙作書画  何  も  退  歩  の  何
 ありし其間  の  事  の  空  前
 とも  し  の  傳  人
 傳の欠点を償ふは是にてあり
 ありし偉功とすべし

○ 廣重の特長

○ 辞の多くは、詞の潤色のあやう
具の、京の塵となくして、一面
多味をもたない、俗筆の、詩的
な、他は、其の法を、見ず

○ 夜半の鐘の響きの、多く、鐘の響きの 横
おとす、と、終末と、又、と、あき

○ 京の、同様の、如く、傑作を、多く、あき
の、世人は、江戸、を、稱し、と、江戸
土、を、め、め、と、三四、個、を、と、
と、あき、と、と、と、と、と、と、と、と、
が、一、と、四、信、を、と、と、と、と、と、
の、ま、官、の、あ、ら、し

○ 情の、
紙、を、と、終、末、と、陰、を、所、謂、終、末

挿画のそのまゝ余存しと見え
たふよ(一) 丘世所 八幡のこ然花眞
の画、優美な華やかなりの
画、情あふりむそぐし、少無
なると情あふりむそぐし、春朗時代
の畫、情あふりむそぐし、

○法長の確

あり見るとまろはる、平凡山

ふ、きき(舟り)まゝい、あやや
猶りまゝまゝなまゝも法長を
和歌を——にあらずやとるも
るま(舟り) 僻目歌

○

始の簡しと佳に後、よくと却て
繁しと醜なるもの世には多し、
あり北島を見らむ豊國を見らむ

齊のまゝ、春朗と稱す。時也の画
と天保以前の画と云ふれり佳なる豊國
の天保より寛政以前の黄表紙と文
政三年その合卷の画と云ふれり佳なる
世の法律を云ふ條目をもも
なるものや、お水門外儀を云ふあり
かり知りしす

○

又見ゆ安永天保以前の黄表紙は紙
楨が作ると云ふ上の署名或は作あり
署名もあらずなく出板年月板えな
とほも云ふりにしと今も年とて調ふ
不便を感ずる。調ふ者も云ふと
不便なれと天保以後の合卷、黄表紙
のやうに云ふりしと表紙も
見返すにも序文も云ふ末も將

吾阿・唐を中にも 作名も画工 柏ん
と出校年日し 題何しを 意を
とくか又 取調きもの ぬらき
なまのや、世に 程もいもの けさ
の 締なるもの なり

の 吾おのしり 予この 浮の 芝 謀さくは
御もて ぶきを 誦するよ 園をり
とおふよ 何しと なぬは 其の あり
考の 画よ かくありしを 芝 謀さくは
たしりし 芝 謀さくは

